

日本帝國產土蜂科雜記 (内田登一博士著日本
動物分類・土蜂科に對する訂正増補)

安 松 京 三

(九州帝國大學彦山生物學研究所)

MISCELLANEOUS NOTES ON THE SCOLIIDAE OF THE JAPANESE
EMPIRE, INCLUDING CORRIGENDA AND ADDENDA TO DR. T.
UCHIDA'S "FAMILY SCOLIIDAE" IN "FAUNA NIPPONICA".

By KEIZÔ YASUMATSU.

周知の如く土蜂科の分類は J. G. BETREM 氏の最近の研究によつて長足の進歩をなした。これを基として北海道帝國大學の内田登一博士が我が國の土蜂科の再検討を行ひ、その結果を北大農學部紀要 (1933) に發表、且それを昨年三省堂より日本動物分類 第10卷第9篇第1號として逸早く公にされた。參考文獻として掲げられたものは前者 (1933) に於て30篇、後者 (1936) に於て51篇を見る。我々はこの好著を得て、從來渾沌として居た日本の土蜂の分類に對し恰も暗闇に光明を見出したかの如き感を抱きその御努力に最大の敬意を表すものである。然しこの好著をして益完璧に近からしめ且光輝あるものたらしめるには將來幾多の人々によつて追加訂正が行はれなければならないと信じ先づ氣附いた點に就いて少しく駄筆を振ふ次第である。

本文を草するに當り先づ内田登一博士に絶大の敬意を表し、本研究中貴重な文獻を御貸與下さつた農林省農事試験場木下周太先生及び常に厚き御指導を賜る九州帝國大學江崎梯三先生に厚く御禮申上るものである。

1. *Scolia saishuana* MATSUMURA (nomen nudum)

サイシウツチバチの行方

1906年 (明治39年) に市河三喜氏 (後出文獻目録を見よ) は“濟州島の昆蟲”なる論文を發表しその中に *Scolia saishuana* MATSUMURA サイシウツチバチなるものを記録された。この標本は市河氏が松村松年博士に送附同定を乞はれたものであることは明らかで、不幸にして松村博士により學界に發表されなかつた

けれども、その標本は北海道帝國大學農學部昆蟲學教室に保存されて居る筈である。内田博士は市河氏の記念すべきこの有益な論文を御存知でないのか、同氏の好著（1933, 1936）中には何等の解決をも與へて居られない。この種が果して如何なる學名を有する土蜂に相當するかを一應は調べるべきで、この仕事たるや北海道帝國大學昆蟲學教室の方々の御努力を御願ひする外はない。

2. *Scolia 4-pustulata* FABRICIUS ヨツボシツチバチの分布

内田博士（1936）はその著 p. 27. 第 1 行目に本種の分布に關し“本邦外に於ては南支那、ビルマ、インド等に分布する”と記して居られる。南支那と北支那とは所謂生物の區系地理學上からはその所屬を異にするものであり。幾分ともこの區系を無視しない學者は、大陸の支那の南と北とを輕々しく記す事は不可能でなければならぬ。所で 1895 年 F. SICKMANN 氏（後出）は本種を北支那から記録し“Ziemlich häufig bei Tientsin”と明記したが、彼の大切な 40 頁に餘る大著は内田博士により見落され無視されるの不幸に遭遇したのは致し方ないとして、同博士の親しく基本文獻とされた BETREM 氏（1928）の論文の p. 316 にも北支那の“Peking”が掲げられてあることを見落してはならぬ。私は將來本種が更に南滿洲に於ても發見される可能性あることをこの際強調しておく。

3. 屋久島の土蜂科

1934 年に私（後出）は“Les Hyménoptères de l'île Yakushima”なる小文を發表した。屋久島は生物地理學上重要な位置にある故、その島に産する昆蟲は如何なるものと雖も一應は吟味せらるべきである。かかる論議に立脚する時内田博士（1936）がその重要性に於てより價値の低い文獻を見て而も私の上記論文を見逃して居られるのは遺憾である。屋久島から私が記録したのは *Campsomeris testaceipes* (CAMERON) アカアシハラナガツチバチ、*Campsomeris binghami* BETREM タイワンハラナガツチバチ及び *Campsomeris annulata* (FABRICIUS) ヒメハラナガツチバチで、この中前 2 者に關する限り内田博士（1936）の著は不十分たるの責を免れない。先づ *Campsomeris testaceipes* に就き同氏によれば“琉球諸島に稀なものでないが未だ他のところよりは發見されてゐない”と記された。その琉球諸島と指される根據は同氏の發表せる範圍内では 1933 年の論文で、その中に掲げられた産地は“Okinawa”（沖繩本島のこと）及び“Erabu”

(江良部島のこと、然し沖江良部か口江良部か判らない)である。私は屋久島は琉球諸島に含まれないと思ふので、屋久島はかかる場合特に産地として掲げた。私の見た屋久島の個體では中胸楯板(稜狀部)に黄色紋が全く缺除してゐる。尙内田博士は各腹節後縁は黄色と記されたが、“das Gelb ist nicht reingelb, sondern etwas bräunlich” (BETREM, 1928)であつて單に黄色ではない。この蜂の分布に就いて更に私は1935年(後出)に、八重山列島の石垣島及び西表島イリオモテ(松村・内田兩氏, 1926, の所謂“Seihioto”)を示したがこれも内田博士は見落して居られる。次に *Campsomeris binghami* につき内田氏(1936)はその分布に臺灣及び印度のみを掲げられたがこれは私の上述の屋久島の文献を見落されたのに由來する。同氏はその雌のみを調べられたらしいが測定には“體長：♀♂ 28mm.”と記された。勿論かかる場合も正しくあり得るが、BETREM氏(1928)は♀♂を親しく測定し“♀：28mm ♂：20mm”なる實測値を出して居るからこれも當然参考すべきである。尙屋久島のものに就いて私の測定によれば、雄は 21.5mm. 位の體長を有する個體であつた。

この外更に今回次の1種*を屋久島の昆蟲相に加へ得ることは野村健一氏の御努力によるもので、茲に採集の勞を執られた同氏に深謝する。

49. *Scolia vittifrons* SAUSSURE et SICHEL アカスヂツチバチ

1 ♂, 20. vii. 1935, 小杉谷, 屋久島, 野村健一氏採集

この個體では顔面中央の橙黄色紋は更に兩側方に伸展し sinus ocellaris まで達する。頭頂兩側の複眼後縁線に沿ふた上方の一小部は橙黄色。腹部は全く黒色。

Scolia vittifrons SAUSSURE et SICHEL forma *hoozanensis* BETREM

2 ♂♂, 20. vii. 1935, 小杉谷, 屋久島, 野村健一氏採集

この型は從來臺灣のみより知られてゐたものであるが、今回屋久島にも産することが判明した次第である。尙 *hoozanensis* の sinus ocellaris は黒色であるが、屋久島産のものはその上部のみ黄色。

アカスヂツチバチに就いては V. Gussakovskij (1932) (後出) の大著の中にも記事があるがこれも内田氏によつて見捨てられて居る。

* これは先に發表した私の小文—屋久島の膜翅類(第二報)(福岡博物學雜誌, vol. 2, no. 1, 1936)—に加ふべきものであつたが、當時若干の疑問を有してゐたので保留してゐた次第で、番號は私が記録した屋久島の蜂に附した便宜上の通し番號である。

4. 腹部環節の數へ方

蜂の第1腹節が後胸部と融合して居ると云ふことは今日我々の常識である。即ち多くの蜂に於ては見掛上の第1腹節（眞の第2腹節）以下が所謂腹部を形成してゐるわけで、従つて眞の第2腹節を第1腹節と便宜上呼ぶ學者が極めて多い。これも亦常識となつてゐる。所が残念なのは内田博士の好著中には上記の常識と、腹部腹板第2節を第1腹面節と呼ぶ新記載法とが織り込まれて居る。然らば如何なる部分かと言ふに p. 6 第12~13行目に“雌に於ては背腹節共に6節、雄にては7節” p. 7 土蜂科の標徴第6行目に“雌は6節、雄は7節を有し、第1腹面節の後方には甚しい横の縊れがある”と述べられる點は上の常識に反しないが、その著書の後半になると常識で指す第1腹面節は無名となり、第2腹面節が同氏の第1腹面節となるの結果となつて居る。これは記載をよく読み、BETREM 氏 (1928) の論文にも注意し更に標本をも親しく見れば自然に判明する誤であるが一般の人々には看過されるであらう。要するに誤記されたものとしか考へられないが、1936年の好著中には兩者相容れない根本的の誤謬が含まれたことになつて居る。即ち次に掲ぐるものは、その第1腹面節と記してあるものを第2腹面節（以下これに準ず）と訂正せねばならぬ。

p. 35 *Scolia decorata* BURMEISTER forma *desidiosa* BINGHAM, ♂ (下より3行目)

p. 46 *Campsomeris grossa* (FABRICIUS), ♂ (上より3行目)

p. 49 *Campsomeris binghami* BETREM, ♀ (下より3行目, 恐らく)

p. 50 *Campsomeris annulata* (FABRICIUS), ♂ (上より10—11行目)

p. 58 *Campsomeris testaceipes* (CAMERON), ♂ (上より16行目)

p. 59 *Campsomeris mojiensis* UCHIDA, ♂ (下より10行目, 恐らく)

p. 61 *Campsomeris formosensis* BETREM, ♂ (下より6行目)

然し私は雄の記載で腹板に言及してあるもの全部に就いて無責任にかく訂正するわけでない證據に p. 55 の下より4行目の *Campsomeris palauensis* (TURNER) forma *uchiyamai* UCHIDA に於ける數へ方は恐らく正しいであらうことを附記しておく。

5. 紅頭嶼の土蜂科

私は1936年秋に鹿野忠雄學兄より依頼されて同氏の採集品を調べ始めたが、その第1報は福岡蟲の會の「むし」誌上に発表した(後出)。それによつて我が國

の土蜂相は更に3種の増加を來したがこれに朝鮮に於て必ず發見されるであらう大型美麗種 *Scolia potanini* MORAWITZ トクナガアカアシツチバチ(安松, 1936, 後出)をも算入すれば更に1種の増加となる。鹿野氏によつて同島から得られた5種は次の如くで全部同島の昆蟲相に新しいものである。

Scolia kanoi YASUMATSU コウトウツチバチ

Scolia 4-pustulata FABRICIUS ヨツボシツチバチ

Campsomeris annulata (FABRICIUS) ヒメハラナガツチバチ

Campsomeris aureicollis LEPELETIER コウトウミケハラナガツチバチ

Campsomeris kanoi YASUMATSU カノハラナガツチバチ

以上の中私が學界未知のものとして發表した2種を除き *Campsomeris aureicollis* に就いてのみ次に和文の記載をなしておきたい。

♀ 黑色。毛も黑色。頭部前面、後頬下面及び前胸側板の毛は白色。後頭上面、前胸及び中胸背板前縁の毛は黄赤褐色。頭頂の微毛は黄金色、胸部の微毛は白色。原種では前脚の基節及び腿節の毛は白色であるが、紅島嶼産のものは然らずして黑色毛に白色毛を混じて居るのみである。翅は暗色、紫青色に輝く。頭部、中胸側板及び後胸側板には點刻なし。單眼は比較的尠。單眼後方の溝なし。肩板は前縁僅かに小點刻を有する。中胸背板及び中胸楯板に非常に粗に點刻される。後楯板は微細且粗に點刻されるがその後縁には點刻を有しない。前伸腹節の水平中區の後縁中央部は少しく凸出して居る。水平中區はその中央幾分點刻を缺いて居るが他の部分は粗に點刻される。水平側區は殆んど點刻を缺くが、その中央部にこれを横切る點刻帯がある。前伸腹節後面は點刻を有しない。前伸腹節の兩側は比較的密に小點刻を有する。腹部は殆んど點刻を缺く。第1背板の兩側部は密に點刻される。他の節の側面は比較的密に且不規則に點刻される。第2乃至第5腹板はその後縁に近く1列の點刻列を有する。第3乃至第4背板の基部には非常に粗に小點刻を認め得る。第2乃至第4腹板は更にその中央部に近くこれを横切る1列の相當大なる點刻よりなる横帯を有する。又第2第3兩腹板の基部に近く不規則な點刻帯をも有する。

♂ (BETREM 1928による) 黑色。腹部は光彩がある。頭楯の兩側、大腿の基部、前胸背板の中央部、前胸背板兩側の條、脛腿兩節上の條、前脚跗節の前面、肩板、第1乃至第5腹節背板の後縁、特に第2及び第3背板の横帯(前方は深

く判られてゐる) 及び第2第3兩腹板の兩側にある斜走の斑紋は黄色。毛は白色、第6腹節以下の毛は黒色、微毛は白色、翅は透明で少しく煙る。更にその先端はより暗色を呈する。

體長 ♀ 18 mm. ♂ 16 mm.

尚詳細は私の原著 (1937) を御覽願ふ。

6. *Scolia oculata* (MATSUMURA) キオピツチバチの問題

1928年に BETREM 氏によつて新種として發表された北支那産の *Scolia pseudo-unifasciata* は 1933年内田博士によつて *Scolia oculata* (MATSUMURA) のシノニムとされた。一方1936年 K. HAMMER 氏は (後出) "Kuldja, Tien-Shan" 及び南蒙古産の 2♂♂, 1♀を檢して南歐及び北アフリカ等に産する *Discobia unifasciata* CYRILLO に同定し, BETREM 氏の *pseudounifasciata* の記載は上記 *unifasciata* によく適合する旨を記し同種ならんとの意見を述べた。これより先, 北支那産のキオピツチバチ類似の種に初めて *unifasciata* なる學名を當てた學者は SICKMANN (1895) である。HAMMER 氏が今一步踏み出して實物の北支那産 *unifasciata* なりと思ふものと南歐産のそれとを比較してこの問題を解決してくればよかつたのであるが, 彼はそこまで手を伸さなかつた。それで私はパリーの Dr. L. BERLAND 氏に御願ひしてコルシカ島産の *unifasciata* CYRILLO (s. str.) を貰ひ受け, これと日本産 *oculata* (MATSUMURA) とを詳細に比較した。その結果によれば HAMMER 氏の意見は全く誤りでこの両者は別種であることが判明したのである。そこで問題は次の如く解決がついた。

Scolia oculata (MATSUMURA), 1911.

= *Scolia unifasciata* SICKMANN, nec CYRILLO, Zool. Jahrb., Bd. 8, p. 225, 1895.

= *Scolia unifasciata* HAMMER, nec CYRILLO, Arkiv f. Zoologi, Bd. 27 A, no. 23, p. 1, 1936.

以下 *oculata* (MATSUMURA) と *unifasciata* CYRILLO との區別點を明示する。

♀ ♀

顔面前額區の點刻は *oculata* に於ては極めて密であるが, *unifasciata* にあつては極めて粗である。前伸腹節水平中區は *oculata* に於けるよりも *unifasciata* に於てより脹んでゐる。腹節各背板上の點刻は *oculata* にては一樣に密であるが, *unifasciata* では中央大部分に於て極めて粗且不規則に分布する。腹部腹板

第3~第5の基部は *unifasciata* では點刻がないが、*oculata* では極めて密に微小點刻を認め得る。腹部の黒色毛は *oculata* に於ては中脰の長さであるが、*unifasciata* に於ては甚しく長い。

♂ ♂

觸角は *oculata* に於て非常に長く、略後翅長と等しく且各部はその長さ幅よりも著しく大で、末端節基部の幅はその長さの $\frac{1}{2}$ に等しい。然るに *unifasciata* の觸角は頗る短く、その長さは後翅長よりも遙かに小で各節（基部6節を除く）は長さと同幅と略等大である。

7. 奄美大島の土蜂科

奄美大島の土蜂の記録は私の知る範囲では1928年に發表された岡島銀次氏（後出）の記事が唯一のものである。これも不幸にして内田博士（1933, 1936）の引用を受けてゐないが、次の2種が記録してある。

1. *Elis grossa* F. ハラナガツチバチ 大島住用〔村〕
2. *Discolia fasciata* Sm. アカスヂツチバチ 大島大和〔村〕

即ち *Campsomeris grossa* (FABRICIUS) の分布の南限は奄美大島と云ふことになつてゐるわけである。私は1933年7月江崎悌三教授の御伴をして奄美大島を親しく訪ね、同島の昆虫相の調査をなしたが、その節同教授と共に採集し得た土蜂は次の2種である。

1. *Campsomeris testaceipes* (CAMERON) 2 ♂♂, 1 ♀, 14. vii. 1933,
住用村, ^{グスク}城。
2. *Scolia* (*Carinoscolia*) *vittifrons* (SAUSSURE et SICHEL,) forma *hoozanensis*
BETREM 1 ♂, 2 ♀♀, 同上。

更に當時の鹿兒島縣立糖業講習所に居られた玉野政文氏が惠送された同島産蜂類の中に *Campsomeris annulata* FABRICIUS があつた。岡島氏の記されたアカスヂツチバチは私等が採集した上記の(2)に相當するものと思はれる。よつて奄美大島産の土蜂科は現在4種類が知られてゐることになつた。

8. 日本産土蜂類の研究に必要な文献の追加 (主なるもののみ)

1. RADOSZKOWSKI, O. (1890): Hyménoptères de Korée. Horae Soc. Ent. Ross., XXIV, p. 227~232 (p. 231).
2. SICKMANN, F. (1895): Beiträge zur Kenntnis der Hymenopteren-Fauna des

- nördlichen China. Zool. Jahrb., VIII, p. 195~236 (p. 223~226).
3. 市河 三喜 (1906): 濟州島の昆蟲. 博物の友, VI, no. 33, p. 183~186 (p. 186).
 4. 坂口總一郎 (1927): 沖繩縣昆蟲總目錄 (p. 5).
 5. 屋代 弘孝 (1927): 沖繩縣昆蟲目錄. No.1 (p. 27).
 6. 岡島 銀次 (1928): 行幸記念奄美大島に於ける 博物調査報告書. 鹿兒島縣 (膜翅目の部, p. 18, 23, 24).
 7. GUSSAKOVSKIJ, V. (1932): Verzeichnis der von Herrn Dr. R. MALAISE im Ussuri und Kamtschatka gesammelten Aculeaten Hymenopteren. Arkiv för Zoologi, 24A, no. 10, 66pp. (p. 50~51).
 8. 菊池立身・菊池行道 (1933): 滿洲昆蟲雜記. 昆蟲界, I, no. 1, p. 78~88 (p. 81).
 9. 野村 健一 (1934): 琉球嶼産昆蟲目錄. 臺灣博物學會會報, XXIV, no. 130, p. 23~31 (p. 25).
 10. YASUMATSU, K. (1934): Les Hyménoptères de l'île Yakushima. Mushi, VII, no. 2, p. 61~76 (p. 64).
 11. 馬場金太郎 (1934): 佐渡島産膜翅類. Mushi, VIII, no. 2, p. 83~85 (p. 85).
 12. YASUMATSU, K. (1935): Further notes on the hymenopterous fauna of the Yaeyama Group. Annot. Zool. Jap., XV, no. 1, p. 33~45.
 13. 安松 京三 (1936): 熱河省産昆蟲類・つちばち科. 第一次滿蒙學術調査研究團報告 第五部, 第一區, 第十一編, 第六十一輯(=), 11pp. 2 pls.
 14. HAMMER, K. (1936): Schwedisch-chinesische wissenschaftliche Expedition nach den nordwestlichen Provinzen Chinas, etc. 43, Hym. 8, Scoliidien, Mutilliden u. Chrysididen. Arkiv för Zoologi, 27A, no 23, 3 pp (p. 1~2).
 15. 安松 京三 (1937): 對馬の膜翅類(第一報). 福岡博物學雜誌, II, no. 2, p. 59~74 (p. 68~69).
 16. YASUMATSU, K. (1937): Hymenoptera collected in TADAO KANO'S Expeditions (1929, 1933, 1935 and 1936) to Botel Tobago Island. I. Mushi, IX, no. 2, p. 120~128 (p. 122~127).
 17. 正木十二郎 (1937): 豆南諸島に於ける昆蟲相に就いて(第一報). 昆蟲, XI, nos. 1 et 2, p. 80~93 (p. 84).